日本語の「ナル表現」再考
―『古事記』における「ナル」の意味・用法の示唆するもの―

守　屋　三　千　代

要　旨

一般に日本語は「ナル的言語」であると言われ、「ナル表現」への志向性が顕著に見られるが、「ナル的言語」は日本語だけではない。例えば韓国語やトルコ語も「ナル的言語」であり、「ナル」に相当する動詞が存在し、「ナル表現」もよく用いられる。この三言語の「ナル」とナル相当語 [tweda, olmak] のうち、日本語と韓国語では主に変化の意味を表すが、トルコ語ではそれ以外に誕生・出現・存在などの意味を表す。こうした意味を現代日本語に求めると、「実がナル」という例しか見当たらないが、『古事記』では神々や国の誕生の場面で誕生・出現の「ナル」が多数観察される。

キーワード：ナル表現　ナル　主観的把握　古事記　認知言語学

1. はじめに：問題のありか

周知のように、日本語話者には「ナル表現」を好む傾向が見られ、これは例えば英語などの西欧語の話者が「スル表現」を好むのと対照的である。この点で、「ナル表現」は一般に日本語の特徴の指標の一つとされる。（池上 1981,1982,2000,2008）本稿で言う「ナル表現」とは、事態の出来・変化に際し、その動因を―たとえ人間であっても―必ずしも言語的に明示せず、話者が事態を主観的･自他合一的･非分析的に把握したことを言語化する表現を指す。例えば「春になった」「財布が落ちましたよ」のように、「ナル」をはじめとする自動詞の表現が選ばれる。これに対し「スル表現」とは、事態の出来・変化に際し、動因―多くは行為者―を軸とし、事態をその動因による動作・作用として分析的に捉え、言語化するものを指す。例えば“Spring has come.”“You dropped your wallet.”

のように、行為者が行為を行うという意味構造をとり、目的語を伴う他動詞の表現も好まれる。

日本語の「ナル表現」において、動詞「ナル」は「事態の出来・変化」に関わる意味を備えている点で、典型的形式である。しかしながら、従来の日本語研究では「アル・スル」の研究に比べ、動詞「ナル」の研究は十分に進んでいるとは言えまい。その原因として、「存在」と「行為」に比し、「出来」や「変化」という概念に注意が払われてこなかったことが挙げられる。本来「出現→存在→変化→状態」といった過程は、言語研究だけでなく哲学的に見ても基本的概念だと思われるが、日本語研究ではこうした視点を欠いてきた。また、「ナル表現」への着目は英語の「スル表現」との対照に発しているため、日本語の記述的研究よりも、日英対照の枠で行われる傾向が顕著であった。さらに、動詞「ナル」は動詞「スル」に比べて抽象度が低いことから、機能動詞としての記述的研究の対象とはなり難いという側面もある。「ナル」自体は「ラレル」のような文法形式とはなり得ないが、否定形による「～しなければナラナイ」「～してはナラナイ」などは文法化し、日本語のモダリティ記述に不可欠の形式と一般に捉えられている。しかし、ここで実現されている文法的意味とは、英語で言う命題を客観的に捉えた上で成り立つモダリティの義務性・必然性といった抽象的な意味ではなく、あくまで主観的事態把握に基づいて実現した、「ナル」の語彙的・文化的意味である。（荒木 1983・守屋 2012）

こうした動詞「ナル」の意味記述への関心の低さの背景には、日英語の対照に注目が集まるあまり、日本語と類型論的に共通する言語との対照に目が向けられなかったという事実がある。しかしながら、その後＜主観的把握＞と「ナル表現」との関わり（池上 2008）が指摘されたのを機に、＜事態把握＞と「ナル表現」、特に膠着語間に共通する動詞「ナル」と「ナル」相当語をめぐる類型論的研究が進み始めた。すなわち、トルコ語をはじめとするトゥルク諸語や韓国語などの、事態の＜主観的把握＞の傾向を有する膠着語では、「ナル表現」および「ナル」相当語が共通して観察され、上記のような否定形による義務や必然といったモダリティに近い意味が実現することもわかってきた。（池上他 2010, 守屋他 2011）ここにおいて、「ナル表現・ナル」の意味を考察する際に、日英語の対照的な枠組みではなく、認知類型論的視点から捉え直すことの有効性と必要性が明らかになってきた。

2.「ナル」の意味

2.1. 現代日本語の「ナル」の意味

現代日本語の「ナル」の意味・用法は次の４つに整理されると考えられる。ここでは『日本語文法大辞典』山口明穂・秋本守英編、『明鏡国語辞典』を参考に整理する。

1. **生ルのナル表現**：新たなモノ・事態の発生 (誕生・結実・完成)
「実がナル」「新社屋がナル」「研究がナル」＊「生る」は自然的発生を意味する。
2. **成ルのナル表現**：事態の変化
「信号が赤にナル」「トマトが赤くナル」「春にナル」
3. **スルのナル表現**：意志的行為の自発的表現
「結婚することにナリマシタ」「率先して手伝うようにナッタ」
4. **デアルのナル表現**：時間的経過の拡大解釈による新事態発生
「全部で３千円にナル」「ご注文の商品はこちらにナリマス」(『明鏡』にのみ所収)

形式に注目して言う限りでは、「ナル表現」のパターンがいわば出揃ったと言えよう。なお、「デアルのナル表現」は便宜的であり、他の用法と同様、動的意味を含むと考えられるが、本稿では紙幅の都合で詳細は割愛する。

2.2.「ナル」の登場

百留・百留 2012 によると、「ナル」は万葉集 (7c 後半～ 8c 後半) ではモノを主体とした使用 (60%)、その３分の２が〈モノが出来る〉〈モノがモノに変化する〉という例で、平安時代の八代集ではモノを主体とした「ナル」が減少し (40%)、古事記 (681 開始 , 712 撰上) では神やモノを主体、その出来や獣などへの変化を示す例が殆ど (92%) であり、源氏物語 (11c 前後) では人やその一部を主体とし、その状態の変化を表す例に偏る (70%)。このことから、古代日本語における動詞「ナル」の用法の変化は、概ねモノを主体とし、その出来や変化を表す用法から人や人の一部を主体とし、その状態の変化を表す用法への拡張という道筋が見えてくるという。この指摘に基づき、以下『古事記』を例に具体的検証を試みる。

2.3.『古事記伝』の指摘する「ナル」の意味・用法

『古事記』に現れた「ナル」に関する注目すべき先行研究として、本居宣長『古事記伝』がある。宣長は『古事記伝』三之巻で「ナル」について、「生る：一つ

には無りしものの生り出るを云ふ、人の産出を云も是なり」、「成る：二つには此の物のかはりて彼の物に変化を云ふ、豊玉比売命産坐時八尋の和邇に化(なり)たまひし類なり」、「為る：三つには作す事の成終るを云ふ、国難成の類なり」の三つの意があるとする。ちなみに、『広辞苑』は本居宣長『古事記伝』の「ナル」の枠組みを踏襲している。すなわち、なる【生る・成る・為る】現象や物事が自然に変化していき、そのものの完成された姿をあらわす。① 無かったものが新たに形ができて現れる。② 別の物・状態にかわる。③ 行為の結果、完成する。これ以外に④ (そのことが自然に生じる意から) 高貴の人の行為を表す敬意表現があるとする。

3.『古事記』に見られる「ナル」

『古事記』の企画は天武天皇 (在位 673-686) によるもので、元明天皇 (在位 707-715) の和銅五年に書かれたと考えられる。序文は成立時の上表文の転用に基づいて、後年書かれた可能性がある。稗田阿礼の口誦を太安萬侶が撰録したもので、上つ巻は神話、中つ巻は神武～応神、下つ巻は仁徳～推古までである。

本稿では、「ナル」の原初的な意味や表現の志向性を『古事記』の上つ巻の神話部分より確認する。それは万葉集よりも前の年代からの口伝えの言葉を収めるとともに、その後の「ナル」の用法の変化をまたず、比較的短い期間に文字化されていること、神々や国を生む場面が描かれる巻であり、発生・出来の表現が集中して観察されるためである。以下、物語ごとにどのような局面でどのような意味の「ナル」が現れるかを観察する。

用例（番号 1 ～ 16）は、全て中村啓信訳注 2009『新版 古事記』による。

3.1. 天地の創成

天地ができあがる時、高天原に神々が現れ、次にその姿を消したという場面である。

1. 天地(あめつち)初めて発(ひら)くる時に、高天原(たかあまのはら)に成りませる神の名(みな)は、天之御中主神(あめのみなかぬしのかみ)。次に高御産巣日神(たかみむすびのかみ)。次に神産巣日神(かむむすびのかみ)。此の三柱(みはしら)の神は、並独神(みなひとりがみ)と成り坐して身を隠したまふ。

   【天と地が初めてひらけた時に、天上世界に出現した神の名は、天之御中主神。次に高御産巣日神。次に神産巣日神。この三柱の神はそれぞれ一神としての単独神でおいでになってその姿を顕らかになさることがなかった。】

ここでの「ナル：成る」は出現、つまり誕生ではなく「既に存在しているものが姿を現す」の意味である。「（高天原に）成りませる」の「成る」は、到達点の「に」を伴い、「坐す」で敬意を伴うことで、後年の「お成り」に近いと考えられる。「（独神と）成り坐して」の「成り坐す」も同様に出現の「お成り」の意味であると考えられる。

3.2. 淤能碁呂嶋

この段は、天つ神々の命によりイザナギ・イザナミが天の沼矛を指し下ろしてかき回し引き上げると、その矛の先から滴り落ちた塩が重なって、嶋と成ったという場面である。

2. 是に天つ神諸の命以ち、伊耶那岐命、伊耶那美命の二柱の神に詔りたまはく、是のただよへる国を修理め固め成せと詔りたまひ、天の沼矛を賜ひて、言依さし賜ふ。故二柱の神、天の浮橋に立たして、其の沼矛を指し下ろして画かせば、塩こをろこをろに画き鳴して、引き上ぐる時に、其の矛の末より垂り落つる塩の累積なり嶋と成る。是れ淤能碁呂嶋なり。

【そこで天の神々の仰せによって、伊耶那岐命、伊耶那美命の二神に、「この漂っている状態の国土を繕い、しっかり固定しなさい」と仰せになり、天の沼矛をお与えになって委任なさった。そこで二神は、天に懸かる浮橋の上にお立ちになって、その玉矛を下界へさし下ろして撹き回されると、海水は撹くたびにコオロコオロと音を立てて、矛を引き上げるときにその先からしたたり落ちた塩が累なり積もって島ができた。これが淤能碁呂嶋である。】

ここでは､「ナス」と「ナル」が現れる。すなわち「成す（為す）→成る（為る）」という、行為とそれに基づく変化結果としての出来の「ナル」の用法である。現代語訳では「島ができた」とあるが、「島となった」という変化の「ナル」でも表現できる。少なくともこのような行為による変化結果を得た場合、日本語では古来「～と成る」が用いられ、「（実・神）が成る」などの「～がなる」の誕生の場合とは区別されていたことがわかる。この点、韓国語・トルコ語の「ナル相当語」は、基本的に主格・ガ格の形式を取る。

3.3. 二神の結婚 -1

イザナギがイザナミに体の在り様問い、イザナミが答え、次にイザナミが自分の体の在り様を述べる場面である。「ナル」はでき（あが）る・成立するの意味

で用いられている。

3. 是に其の妹伊耶那美命を問ひて曰りたまはく、汝が身は如何にか成れるととひたまふ。答へて曰さく、吾が身は成り成りて成り合はぬ処一処ありと曰す。尓して伊耶那岐命詔りたまはく、我が身は成り成りて成り余れる処一処あり。

【そこで伊耶那岐命は、妻の伊耶那美命に、「おまえの体はどのようにできているのか」と問うと、「私の身は成長し終えてもなお合わないままのところが一か所あります」と申したすると、伊耶那岐命がおっしゃるのには、「我が身は成長し終わって、余ったところが一か所ある。】

ここでは「成れる」の形式で、「なっている」という変化の結果の状態の用法が、また「成り成りて」という形式で、変化の継続の用法が観察される。この場合の「ナル」は、既にある物の変化というよりも、完成に向かう生成過程と捉える方が適切である。

3.4. 二神の結婚 -2

以下は、上記 3.3 に次ぐ句場面である。ここでは「生む」と対比しながら考える。

4. 故此の吾が身の成り余れる処を以ち、汝が身の成り合はぬ処に刺し塞ぎて国土を生み成さむ* と以為ふ。生むことといかにとのりたまふ。

【そこで我が身の成り余ったところを、おまえの身の成り合わなかったところに刺し塞いで国を生みつくりたいと思う。どうだろうか」。】

ここでは「生み成す」というように、「生む」と「成す / 為す」という語が区別して用いられていることに注目される。すなわち、「生む」は子や国をあたかも分身のようにもうけ、世に送ることであり、「成す」は価値づけされた存在としてあらしめることだと考えられる。

上の文章に続いて、「生む」は様々な国を生む場合でも用いられている。

5. かく言ひ竟へて、御合ひたまひ、生める子は淡道之穂之狭別嶋。次に伊豫之二名嶋を生む。

【このように言い終わって結婚なさって、生んだ子が淡道之穂之狭別嶋、次に伊豫之二名嶋をお生みになった。】

3.5. 黄泉の国 -1

人の誕生の場合、「生まるる」は用いられるが、「ナル」は用い難い傾向が見られる。

6. 汝然為ば、吾一日に千五百の産屋を立てむ」とのりたまふ。これを以ち一

日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人生まるるなり*。

【おまえがそうするなら、「自分は一日に千五百の産屋を建てよう」と仰せになった。こういうことがあって、この世では人は一日に必ず千人も死に、一日に必ず千五百人も生まれるのである。】

3.6. 黄泉の国 -2

ここでは「えびかづらの実がナル」という、「実がなる」の例が見られる。

7. 尓して伊耶那岐命、黒御縵を取り投げ棄つるすなはち蒲 子 生る*。

【(怒った伊耶那美命が黄泉の国のシコメに追わせた) そこで伊耶那岐命は頭につけていた黒い髪飾りをはずして投げ棄てるやいなや、山葡萄の芽が生え花が咲き実がなった。】

この用法は現代語の「ナル」に通じるとともに、現代トルコ語にも見られる。しかし、古事記全体ではこうした例はあまり見られず、現代韓国語のナル相当語では見られない。

3.7. 禊禊 -1

黄泉の国から戻ったイザナギは禊を行う。禊ぎ祓いをする時に持ち物を投げ棄てると、そこに神々が誕生する。

8. 伊耶那伎大神詔りたまはく、吾はいなしこめしこめき穢き国に到りて在りけり。故吾は御身の禊為むとのりたまひて～　禊き祓へたまふ。故投げ棄つる御杖に成れる神の名は衝立船戸神。次に投げ棄つる御帯に成れる神の名は道之長乳歯神。

【投げ棄てた御杖に出現した神の名は衝立船戸神、次に投げ棄てた御帯に出現した神の名は道之長乳歯神。】

この時の「ナレル」の「成る」は新たな存在の誕生の意で、出現ではない。また人的行為による「生まる」ではなく、自発あるいは潜在力による誕生である。神の誕生がこのように表現される点で、「ナル」の表現により価値が置かれていることがわかる。投げ棄てる物、すなわち誕生の場は「に」で示されており、「木に実がナル」と同じ構造を持つ。

3.8. 禊 -2

イザナギは三人の神々を誕生させる。この時も誕生の意味で「ナル」が用いられている。

9. 是に左の御目を洗ひたまふ時に成りませる神の名は、天照大御神。次に右の御目を洗ひたまふ時に成りませる神の名は、月読命。次に御鼻を洗ひたまふ時に成りませる神の名は、建速須佐之男命。

【この禊の最後に、左の御目をお洗いになった時に出現なさった神の名は、天照大御神。次に右の御目をお洗いになった時に出現なさった神の名は、月読命。次に御鼻をお洗いになった時に出現された神の名は、建速須佐之男命。】

この三人の神々は重要な地位を持つため、敬意を伴う「成りませる」が用いられている。ここにおいて、どのように生まれるか、生まれるのは人か、神か、どのような神かに応じて、「生む・生まれる・なる・なります」が使い分けられていることが窺える。

3.9. 三貴子の分治

ここでは上記の誕生が、イザナギの立場で「生らす」という語で表現されている。

10. 此の時に伊耶那伎命いたく歓喜ばして詔りたまはく、吾は子を生らし、生らして、生らす終に、三の貴き子を得つとのりたまふ。

【この時に伊耶那伎命はたいそうお喜びになって、「自分は子を次々と生まれさせて、生まれしめることの終わりに、三神の貴い子を得ることができた」と仰せになった。】

「生らす」は「人為的に生む」のではなく、「自発的に生るようにする」の意味で用いられていると考えられる。ここにも自発的な誕生への価値づけが観察される。なお、「生らす」を「生らす」とする読み方は、『古事記伝』に宣長が行ったという記載がある。

3.10. 誓約

天照大御神が速須佐之男命に、それぞれの持ち物から子が誕生したことについて、「生る・成る」を用いて述べている。

11. 是の、後に生れし五柱の男子は、物実我が物に因り成れり自づから吾が子なり。先に生れし三柱の女子は、物実汝が物に因り成れり。故汝が子なり」と、かく詔り別けたまふ。

【「この後から生まれた五神の男子は、素が自分の物から成った、我が子です。先に生まれた三神の女子は、素があなたの物から成った。だから、あなたの子です」と、このように子の区別を決めて仰せになった。】

ここでは、「生(あ)れし子は、物によって成った」と、行為により誕生した貴い存在が、「～に因り」と一定の材料・道具による新事態の出来として表現されている。

3.11. 天の石屋

意味的には変化でありながら、形容詞に変化の意味の「ナル」が付かない例が見られる。

12. 是に天照大御神怪(あや)しと以為(おも)ほし、天の石屋(いはや)の戸を細めに開きて内より告りたまはく、吾が隠(こも)り坐すに因りて、天の原自(おの)づから闇(くら)く、また葦原中国もみな闇けむと以為ふを～。

【この様子を天照大御神は不思議にお思いになり、天の石屋の戸を細めに開けて、石屋の内から声をおかけになった。「自分がここに籠ってしまったので、天上世界はおのずと闇となり、地上世界の葦原中国もみな暗闇であろうと思うのに～。

「闇く」「闇けむ」とも、変化の「ナル」が用いられていない。源氏物語以降は「ナル」は変化の意味が中心になったとすると、この時点では「ナル」は出来・誕生の意味が中心的であったと考えられる。この点は次例も同様である。

3.12. 大国主神 -1

稲羽(いなば)の素菟(しろうさぎ)が大国主神に教えられて体毛が元通りになる場面である。

13.（是に大穴牟遅神(おおあなむぢのかみ)、其の菟(うさぎ)に教へて告りたまはく、今急(すみや)かに此の水門(みなと)に往き、水を以ち汝が身を洗ひて、即ち其の水門の蒲の黄(はな)を取り、敷き散らして、其の上に輾(こ)い転(まろ)ばば、汝が身本の膚の如く必ず差(い)えむ、とのりたまひき。）故、教の如為しかば、其の身本の如し*。此れ稲羽の素菟(しろ)ぞ。

【その教えの通りにすると、身は元のようになった。これが稲羽の素菟である。】

ここでも変化の「なる」が用いられていない。「其の身本の如し」は「本の如く（と）なり」とすることも可能かもしれないが、「如し」には、「ナル」が後接しない可能性がある。

3.13. 大国主神 -2

以下の変化の「ナル」が見られる例は、古事記の上つ巻ではほとんど見当たらず珍しい。

14. 尓してキサ貝比売きさげ集めて、蛤(うむ)貝比売待ち承けて、母の乳汁(ちしる)と塗れば、

麗しき壮夫(をとこ)に成りて出で遊び行く。

【キサ貝比売が(身を削った貝殻の粉を)集め、それを蛤貝比売が自身の貝殻に待って受け入れ、貝汁で練り合わせ、母乳のようにして塗ったところ、大穴牟遅神は蘇生して、立派な男になり、出てお行きになった。】

これは、後年の変化の「ナル」が現れた例だとも考えられるが、むしろ変化ではなくあくまで死から蘇生し、新事態の出来・再誕生として表現されていると考えられよう。

3.14. 木花之佐久夜毗売 -1

木花之佐久夜毗売は人間として神の子を生む。また、ここでは出産の仕方の詳細を描く。そのせいか、「生む」ではなく「産む」の文字が用いられていることに注目される。

15.(木花之佐久夜毗売)戸無き八尋殿を作り、其の殿の内に入り、土を以ち塗り塞ぎて、方(みざかり)に産む時に、火を以ち其の殿に着けて産みたまひき。

【(木花之佐久夜毗売は)出入り口のない大きな建物を作り、その屋内に入り、土で塗り塞いで、今まさに出産という時に、火をその建物につけて火中でお産みになった。】

3.15. 木花之佐久夜毗売 -2

木花之佐久夜毗売は神々を生む。火照命と火須勢理命には「生める」が用いられるが、貴い神である天津日高日子穂々出見命には、貴人に対する「生(あ)れませる」が用いられる。

16.(木花之佐久夜毗売)故其の火の盛りに燃ゆる時に、生める子の火照命(ほてりのみこと)。次に生める子の名は火須勢理命(ほすせりのみこと)、次に生(あ)れませる子の御名は火遠理命(ほおりのみこと)。またの名は天津日高日子穂々出見命(あまつひこひこほほでみのみこと)。

【その火が盛んに燃える時に生んだ子の名は、火照命、次に生んだ子の名は、火須勢理命、次にお生まれになった子の御名は、火遠理命。別名は天津日高日子穂々出見命。】

4. おわりに：

4.1.『古事記』に見られる「ナル」

以上より、次のようなことがわかる。誕生・出現に対して「生(な)る / 成る」、誕生に対して「生まる」「生(あ)る」が用いられている。このうち「生る / 成る」は人間・

神、および木の実の場合、「生まる」は人間の場合、「生(あ)る」は貴い神の場合に用いる傾向がある。

「ナル」は行為者の姿にフォーカスを当てず、出来や実現そのものを主観的に、非分析的に捉えた表現として用いられる。この場合、驚くべきトピックとして、価値づけされる、mirativity の表現として用いられている可能性がある。

「生む・産む」は神あるいは人の出産行為であり、行為者に視点をおき、神・国および人間を生む場合に用いられる。このうち「産む」は主に人の出産行為について用いられる。

形容詞に後接する「変化の成る」は見られるが、『古事記』では多くは観察されない。

冒頭に挙げた現代日本語の「なる」の用法のうち、「スルのナル表現」および「デアルのナル表現」は今回の『古事記』上つ巻には見当られなかった。その後、「ナル」がこうした誕生・出現の意味では用いられなくなるのは、『古事記』が国生みと神々の誕生の物語であること、そのことに大きな価値づけがなされた物語であること、そしてこうした和文による神話が書かれなかったことと深い関連があると思われる。

4.2. 今後の課題

上記の誕生・出現の「ナル」は、現代韓国語ではナル相当語 [tweda] では表現できないが、トルコ語では [olmak] で表現できる。例えば、「来月子供が生まれる」は“Gelecek ay çocuğum **ol**acağım.（来月私の子どもが生まれる：**ナル** − 未来形語尾）”、「昨日彼は学校に来た」は“Dün o okula **ol**du.（昨日彼は学校に来た：**ナル** − 過去形語尾）”という言い方が当たり前に用いられる。このことは何を意味するのだろうか。日本語の「ナル」の原初的な姿はどのようなものか、その変化の軌跡はどのようなものかを探るために、さらに考察を進めたい。

参考文献

荒木博之 1983『やまとことばの人類学』朝日選書

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店

――――（1982）「表現構造の比較―〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語―」國廣哲彌編『日英語比較講座 4 発想と表現』に所収 大修館書店

――――（2000）『日本語論への招待』講談社

――――（2008）「『する』と『なる』の言語学』を振り返って」『国文学：解釈と鑑賞』73(1) pp.88-92

――――・守屋三千代・テキメン・アイシェヌール（2010）「ナル表現」再考－膠着語における事態の〈主観的把握〉の観点から」『認知言語学会論文集』第10号 pp.366-376

――――・守屋三千代・百留康晴・百留恵美子（2013）「＜見立て＞から考える日本語と日本文化の＜相同性＞　比喩との相違を視野に入れて」『日本認知言語学会論文集』第13巻

――――・守屋三千代・テキメン・アイシェヌール・金智賢（2015）「日本語・韓国語・トルコ語の＜事態把握＞と『ナル表現』」認知言語学会全国大会ワークショップ予稿集

神野志隆光・大庭みな子（1991）『新潮古典文学アルバムⅠ古事記・日本書記』新潮社

中村啓信訳注（2009）『新版 古事記』角川ソフィア文庫

百留康晴・百留恵美子（2012）「古代日本語におけるナル表現」『認知言語学会論文集』第12巻 pp.543-548

三浦裕之（2010）『古事記を読みなおす』ちくま新書

守屋三千代（2011）「現代日本語の『ナル』と『ナル表現』―〈事態の主観的把握〉の観点より―」『認知言語学会論文集』第11巻 pp.560-563

――――（2012）「日本語教育から『日本語のモダリティ』を考える」『ひつじ意味論講座4 モダリティⅡ：事例研究』ひつじ書房 pp.215-232

森山新（2011）「日本語のスル動詞と韓国語のhada動詞から見た日韓両言語のナル性」『認知言語学会論文集』第11巻 pp.572-574

（もりやみちよ、本学教授）